

『古代アメリカ』18, 2015, pp.65-77

<調査研究速報>

## インガタンボ遺跡（第四次）およびイエルマ遺跡の発掘調査

山本睦（山形大学）  
マリーナ・ラミーレス

### 1. はじめに

2015年6月から7月上旬にかけて、ペルー共和国北部に位置する、カハマルカ県ハエン郡ポマワカ地区において、インガタンボ遺跡とイエルマ遺跡の発掘調査を実施した<sup>(註1)</sup>（写真1, 2; 図1, 2）。各遺跡の調査期間が2週間程度の小規模な発掘ではあったが、事前に想定した以上の成果がえられた。以下、本文では、調査背景、とくにインガタンボ遺跡とイエルマ遺跡の調査対象地域における位置づけについて、先行研究とともに概観したうえで、本発掘調査成果を報告する。



写真1 インガタンボ遺跡、基壇Eと方形広場



写真2 イエルマ遺跡全景

### 2. 調査背景：インガタンボ遺跡とイエルマ遺跡の位置づけ

インガタンボとイエルマの両遺跡は、ペルー北部山中から熱帯低地へと流れるワンカバンバ川の南岸にある。

筆者らは、2005年よりワンカバンバ川流域で調査を継続しており、これまでに遺跡分布調査〔山本2012, 2014〕、および3期にわたるインガタンボ遺跡の発掘調査〔山本2011, 2012〕を実施してきた。

2005年の分布調査では、流域内で129遺跡を登録した。そのうちの62遺跡が形成期（紀元前3000年—紀元前後）に属する。それらすべての遺跡で形成期中期（紀元前1200—800年）の利用がみとめられる一方で、形成期後期（紀元前800—550年）に対応するのは、わずかに3遺跡だけ

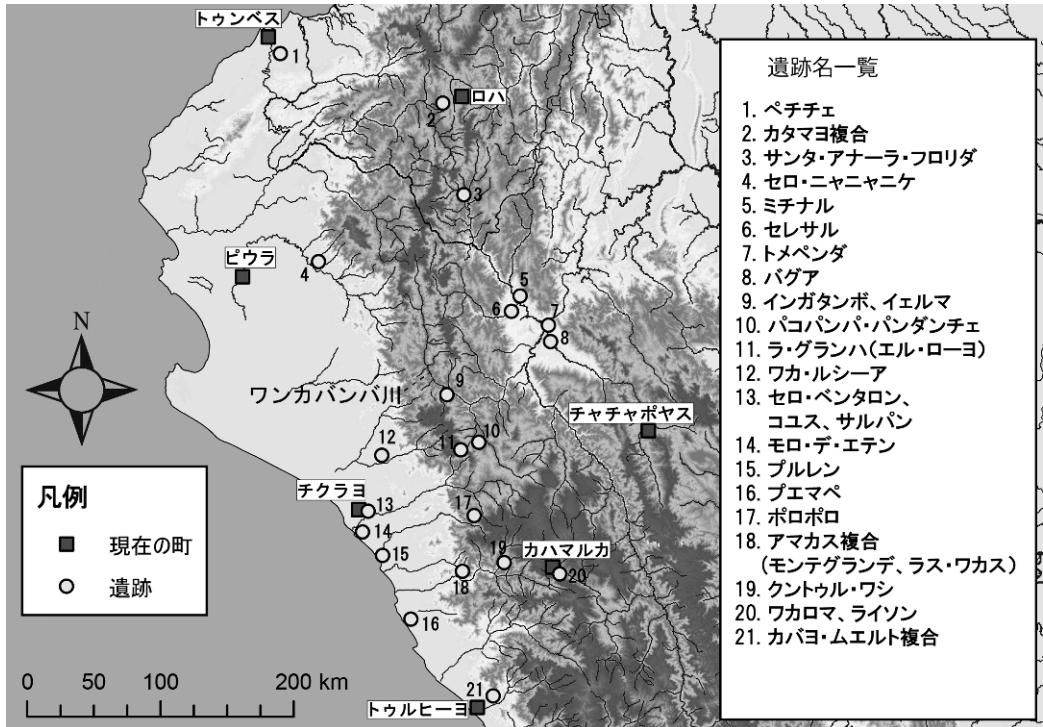


図1 インガタンボ遺跡とイエルマ遺跡の位置

であった。

インガタンボ遺跡の発掘調査によって編年が確立されている形成期以外の時期については、その詳細はいまだ不明な点が多い。そのため、後期中間期（紀元後 900–1476 年）や後期ホライズン（紀元後 1476–1532 年）の編年<sup>(註2)</sup> およびセトルメントに関して、今後の検討が必要である。しかし、この状況のなかでも、ワンカバンバ川流域において、形成期がおわると遺跡数が減少し、後期中間期（44 遺跡）と後期ホライズン（35 遺跡）に遺跡数が再び増加傾向にあることは注目すべきである。これに関しては、海岸部と熱帯低地に展開した社会間の相互交流やインカ道の存在 [INC 2006] などが、その背景となっている可能性がある。いずれにせよ、形成期より後の時期の情報は極めて乏しく、この問題を議論するためには、データの充実が不可欠である。

2015 年の発掘対象となった両遺跡は、分布調査時にいずれも形成期の神殿遺跡と考えられた遺跡である（図 2）。また、地表面観察において、流域内で最も大規模な神殿遺跡がインガタンボで、次に続くものがイエルマ遺跡と想定された。さらに、両遺跡ともに、形成期がおわるといったん利用されなくなるものの、後期中間期および後期ホライズンになると再度集中的な活動が確認され、地表には複数の部屋状構造物も視認される。つまり、両者ともに、形成期ならびに後期中間期と後期ホライズンという異なる時期において、流域内で重要な役割をはたした遺跡であったと考えられるのである。

これまでに筆者らは、形成期におけるワンカバンバ川流域の社会動態、とくに周辺地域との地域間交流と社会変化の相関を明らかにすることを主目的として、インガタンボ遺跡（2006 年、2007

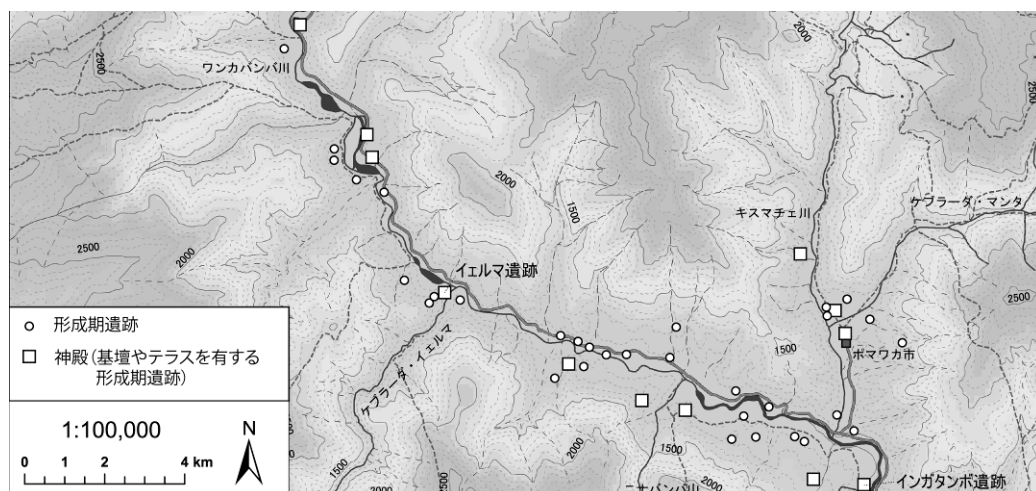


図2 インガタンボ遺跡とイエルマ遺跡周辺の形成期遺跡

年、2011年)で発掘調査をおこなってきた。その結果、インガタンボ遺跡において、形成期から後期ホライズンにわたる計5時期の建設活動を確認した。そのうちの「ワンカバンバ期」、「ポマワカ期」、「インガタンボ期」と名づけられた1~3時期目は、放射性炭素年代測定もふまえて形成期に対応することが明確である。その一方、「タンボ期」と称される5時期目は、年代測定を実施していないため、年代幅については留保せざるをえない。しかし、建築特徴や出土遺物から、後期中間期から後期ホライズンに相当すると考えられる<sup>(註3)</sup>。したがって、流域内の社会動態をとらえるためには、筆者らの中心的な研究対象である形成期だけではなく、後期中間期や後期ホライズンまでをふくめた、より通時的な視点にたつて、この問題に取り組んでいく必要がある。

インガタンボ遺跡では、ワンカバンバ期(紀元前2500-1200年)に自然の丘陵を利用して、主要基壇の建設がはじまり、周期的な増改築「神殿更新」が繰り返されることで、徐々に基壇が大規模化する。

つづくポマワカ期(紀元前1200-800年)に入ると、様々な地点で基壇建設が開始され、更新のたびに各基壇はその規模を増していく。ただし、主要基壇とB基壇は併存していたが、両者の関係性については不明瞭である。遺跡全体を貫くような建築プランは存在しなかったと考えられる。また、土器や海水生種の貝など周辺地域との地域間交流を示す遺物が次第に確認されはじめるのも、この時期からである。

遺跡全体が一つの基壇複合となるのは、インガタンボ期(紀元前800-550年)になってからである。A基壇上に主要基壇が載るような構造を呈しているが、主要基壇が巨大化してA基壇となり、それとB基壇間に方形広場が現れて、その周囲に小基壇が建設される(図3)。つまり、インガタンボ期には最大規模の更新がおこなわれ、神殿が巨大化するとともに配置も複雑化したのである。また、基壇上には黄褐色の上塗りがほどこされ、精巧に仕上げられた部屋状構造物群が築かれる。さらに、ペルー南部起源の黒曜石もあらわれるなど周辺地域や遠隔地との地域間交流を示す遺物がより顕著になる。それらは、インガタンボ神殿およびそれを支えた社会の変化において、イデオロギーや儀礼と関わる外来の物資や情報の獲得と利用が与えた重要性を示唆するも

のである。

これを支持するように、地域間交流が活発化しはじめるポマワカ期には、流域全体で多くの遺跡が確認され、そのなかにはインガタンボ遺跡やイェルマ遺跡のように神殿遺跡と考えられるものも存在する。

しかし、この状況はつづくインガタンボ期になると大きく変化し、インガタンボが流域内の社会統合の核となるとともに、他の神殿における活動がほとんどみられなくなる。

後期中間期と後期ホライズンに比定される最後のタンボ期には、インガタンボ期の基壇を再利用しながら、基壇上に複数の建造物が築かれた。しかし、形成期までにみられたような大規模な建設活動はおこなわれなくなったようである。

このように、ワンカバンバ川流域では、編年が確立されつつあり、考古学的諸状況が次第に明らかになってきてはいる。しかし、同流域内で発掘調査が実施された遺跡は、インガタンボ遺跡しかない。そのため、形成期において、インガタンボと他の遺跡、とくに他の神殿遺跡との関係は明らかではない。また、インガタンボでみられた様々な現象が他の遺跡でも同様に認められるのか否か、あるいは遺跡間で異なる社会展開がみられるのかという問題も検証する必要がある。これらの課題へ取り組むことは、ワンカバンバ川流域の社会動態を論じる際にはもちろん、広くペルー北部における形成期社会の展開を考察するうえで、重要であると考えられる。

さらに、後期中間期や後期ホライズンに関しても、より詳細な編年を確立したうえで、同時期に併存したと考えられるインガタンボとイェルマの遺跡間関係を明らかにすることが、流域内の社会動態を論じるうえで重要な課題である。

以上の先行研究や課題をもとに計画されたのが、2015年の調査といえよう。

### 3. 発掘調査概要：インガタンボ遺跡

インガタンボ遺跡の主要部分は、A基壇とB基壇および両基壇間の方形広場と小基壇からなる(図4)。これまでの調査では、最大規模を誇るA基壇の南側を集中的に発掘してきた。また、遺跡踏査時の地表面観察から、既述の方形広場は、ワンカバンバ川より南のペルー北部海岸や北部山地にみられるような半地下式広場ではないと推測されている[山本2012]。

2015年の調査目的は、インガタンボ期におこなわれた最大規模の神殿更新過程の一端を解明することである。具体的には、第一に、インガタンボ期に建設されたA基壇北側の形状と広がり、

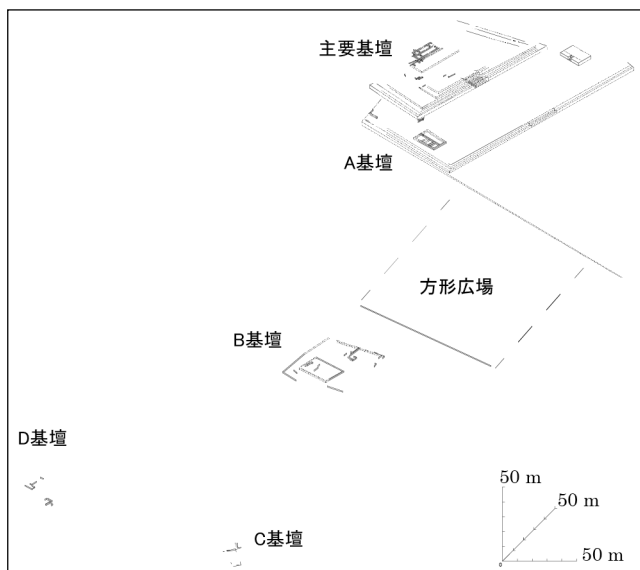


図3 インガタンボ期主要建造物復元図

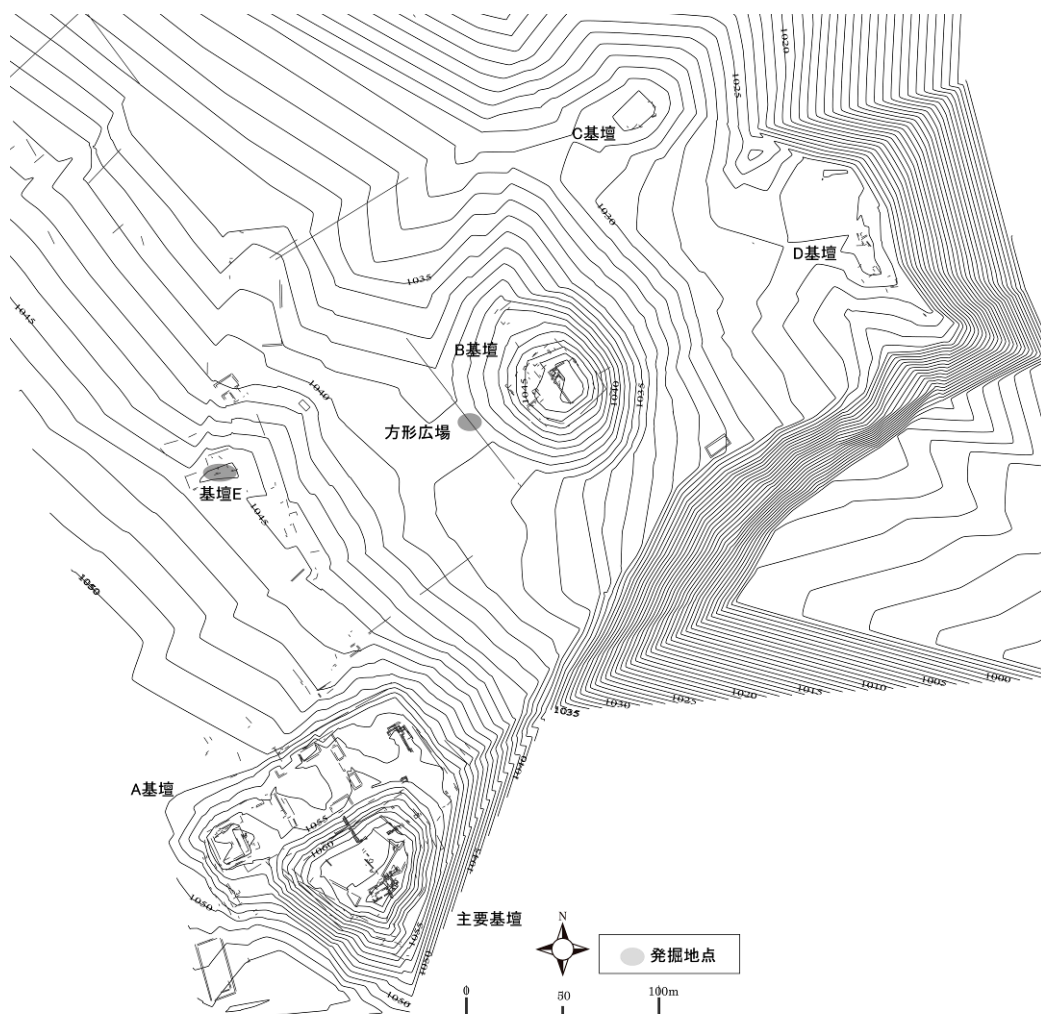


図4 インガタンボ遺跡全体図

とくに基壇北端に載るE基壇の発掘によって、明らかにすることである。そして、A基壇とB基壇間の方形広場を発掘し、その形状および各基壇との関係を把握することが第二の目的であった。

### 3-1. 基壇Eの発掘（写真3）

発掘では、A基壇北端に載る小基壇Eに、南北2m×東西12mの発掘区を設けた。この基壇上あるいはその周囲には、A基壇南側で確認されたタンボ期の部屋状構造物と同様の建築軸や石積み技法で築かれた部屋状構造物が散見される。そのため、E基壇と部屋状構造物の形態と堆積状況、および編年の位置づけを把握することを通じて、E基壇の建設時期を特定することがねらいであった。

発掘では、はじめに表土と表土中に崩落し、埋没している壁材の除去をおこなった。表土中および地表面に近い土層からは、大量のタンボ期の土器が出土し（写真4）、また、表土をはいだ時





写真3 発掘区全景



写真5 インガタンボ期の土器



写真4 タンボ期の土器



写真6 基壇基部の埋土層

点で発掘前に地表面で視認された石壁を検出した。石組みやレベルなどを考慮すると、この壁は発掘区の周囲に散見される石壁と組んで、部屋状構造物群を呈するものと考えられる。

さらに、表土中からは異なる石壁が検出され、これは発掘区の北側にある石壁と組んで、部屋状構造物を構成することが明らかになった（部屋状構造物 1）。部屋状構造物 1 の壁は、30cm 大に整形された石で築かれており、部分的に黄褐色の上塗りがほどこされていた。部屋状構造物 1 に対応する床面は検出されていないが、この構造物直下からは、複数の石壁によって構成される新たな部屋状構造物（部屋状構造物 2）が検出された。部屋状構造物 2 は、部屋状構造物 1 と同様の技法で建設されており、黄褐色の上塗りも確認された。地表面から 80 cm ほど土層を掘り下げた箇所で、部屋状構造物 2 に対応する床面が部分的に検出されたが、この床と上塗りの土は同様のものであった。また、部屋状構造物 2 の床面は、数度にわたって張りかえられており、小規模な改修作業がおこなわれていたことが示唆された。

表土直下の層から床面までの覆土からは、タンボ期の土器にまじってインガタンボ期の土器が確認された（写真 5）。床面下はインガタンボ期の純粋層であるため、部屋状構造物 2 はインガタンボ期に属することが確実である。建築技法などからは、部屋状構造物 1 もインガタンボ期のものと推測される。前シーズンまでに明らかとなっているように、それぞれがインガタンボ期のサブ・フェイズ 1 と 2 に対応すると考えられる。

部屋状構造物 2 の床下を 60cm ほど掘りすすめると、大きいもので一辺が 1m 大の石が包含さ

れた厚い層が検出された（写真 6）。この層は、これまでに A 基壇で確認された基礎部分の人工的な埋土層と同様のもので、本発掘でも少なくとも厚さ 1.6m 以上続くことが確認された。安全面の問題もあり、自然の岩盤まで掘り下げることができなかったが、これまでの成果を鑑みると、この層は、自然の岩盤直上から 2-3m の高さで盛られ、基壇の基礎を形成すると考えられる。

前シーズンまでの発掘では、A 基壇南側（中心部近く）の部屋状構造物内および部屋状構造物の基部から、搬入品と考えられるバリエーションに富んだ大量の精製土器、および海産性の貝製品、動物骨が多数出土した。更新時の奉納品とも推測されるそのような遺物は、今回の調査では確認されていない。

今シーズンのデータを総合すると、E 基壇は、インガタンボ期に遺跡全体にわたって大規模な更新活動がおこなわれた際に、A 基壇の一部として築かれたものと考えられる。その場合、A 基壇は約南北 260m、東西 140m の基壇となり、われわれが想定していた以上に巨大で、ペルー北部一帯においても有数の、形成期の大基壇となる可能性がある。

また、発掘前に想定していたように、自然の丘陵ではなく、基礎部分を大量の埋土（多量の石を含む）で整形しており、これは A 基壇の他の部分でもみられる。ここからは、基壇の建設に際して、その基部から注意深く、丁寧に築かれたこと、そしてときには儀礼活動の存在を想起させるような奉納品をともなう一定の手続きがとられていたことがうかがえる。このことは、神殿建設を儀礼の一環とする従来の仮説とも一致する [加藤・関編 1998]。

その一方、タンボ期の建造物に関しては、これまでの調査では A 基壇南側、とくに主要基壇とそれに隣接する部分にのみ確認されていたが、基壇北側でも同様にインガタンボ期の建築が再利用されていたことが明らかとなった。

### 3-2. 方形広場の発掘（写真 7）

発掘では、B 基壇西端と方形広場の東端の接合部分に、南北 2m×東西 10m のトレンチを設けた。該当箇所には面をもたない石列が視認されており、この石列と広場および基壇との関係をさぐることも必要と考えられたためである。

発掘の結果、既述の石列は表土中に底面があり、現代のものと確認された。また、表土下には堆積層がほとんどなく、10-30cm 程度の厚さしかない薄い層を 1 層掘り下げただけで、すぐに自然の岩盤に到達した。また、これらの層からは、タンボ期とインガタンボ期のものと考えられる土器が若干検出された以外に、ほとんど遺物が出土しなかった。さらに、床面や他の建造物も全く認められなかった。

これらのことから、インガタンボの方形広場は、ペルー北部海岸や北部山地の他の神殿遺跡でみられるような半地下式でも側壁を持つようなものでもなく、単に基壇間が方形かつ平らにならされただけの開放空間であったと考えられる。なお、これまでに発掘をおこなったインガタンボのどの区画においても、表土から自然の岩盤まですぐに到達できるような箇所はほとんど



写真 7 発掘区全景

ど存在しない。そのことから、インガタンボ期の A 基壇建設時に必要となった基礎の盛土には、方形広場部分を整形した際に排出した土砂が用いられた可能性が示唆される。

#### 4. 発掘調査概要：イエルマ遺跡

イエルマ遺跡は、イエルマ山の頂上部から裾野にかけて広がる遺跡で、遺跡踏査ではイエルマ 1～6 に分割して遺跡登録をおこなっている<sup>(註4)</sup>。本調査対象となったのは、そのうちのイエルマ 6 遺跡である（図 5）。

その理由には、現在の社会状況と学術的理由があげられる。まず前者は、遺跡の直上にイエルマ集落が存在するため、遺跡の保存状態が極めて悪く、侵食や破壊などの恐れがあり、貴重なデータ消失の前に緊急発掘を要する状況にある。また、後者としては、地表面観察によって、形成期と後期中間期の土器片が確認されており、全体としてみると巨大な遺跡複合を呈することがあげられる。とりわけ、地表面に形成期の土器がみられたイエルマ 6 遺跡の面積が、流域内でインガタンボに次いで大規模なものであった点は重要である。そのため、インガタンボ遺跡との比較という視座のなかで、流域内の社会動態を検討するためにも、非常に有効な調査対象であると位置づけることができよう。

本調査の目的は、第一に、層位にもとづいた建築データや土器といった基礎データの獲得であった。また、遺跡の年代的位置づけを明らかにして、インガタンボとの比較資料を入手することも大きな目的の一つであった。

##### 4-1. 主要階段の発掘（写真 8）

2005 年の遺跡踏査の際に、イエルマ遺跡南東部において数段のステップをもつ階段が確認された。この階段は、遺跡の南を流れるケブラーダ<sup>(註5)</sup>から遺跡へのアクセスであったと考えられる。発掘ではまず、階段の石壁を基準にして、基本単位となる 2m×2m のグリッドを組み、それを遺跡全体に広げた。この区画では、階段の建設時期を解明したうえで、その下部の堆積状況を確認することを目指して、東西方向に幅 2m、長さ 10m、南北方向に幅 2m、長さ 8m の発掘区を、十字をきるように設定した。

発掘の結果、全体的に堆積が非常に薄く、深いところでも 1.2m

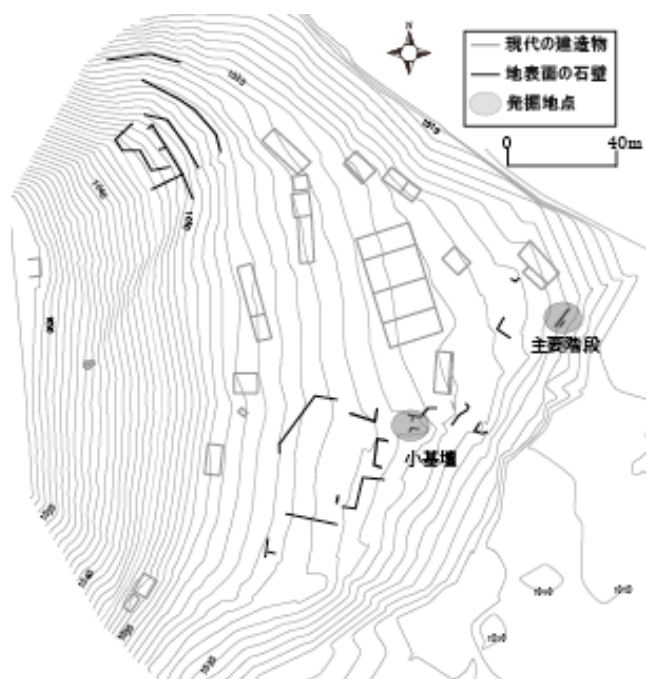


図 5 イエルマ遺跡全体図



程度で自然の岩盤に到達することが確認された。後期中間期あるいは後期ホライズンの土器をと  
もなう 10-20cm ほどの薄い表土をはぐと、少なくとも 5 段のステップ（階段 1）が認められた。  
また、表土下の土層を掘り下げるとすぐに、階段 1 の下に 2m 程の幅で、1m 大を超える大石を  
袖壁とし、2 段のステップをもつような階段状構造物（階段 2）が検出された。構造物上に大石が  
落ち込んでおり、安全を期してその除去を断念したため、その詳細は不明な点もある。しかし、  
両階段のレベル差があまりないこともあり、階段 1 は階段 2 のステップや袖壁を部分的に利用し  
つつ、その直上にはほぼ同一軸で建設されたと考えられる。両階段とも基本的な建築技法は同じで  
あり、30cm 大の切石で築かれている。残念なことに、急峻な崖があり、それ以上階段の南側部分  
を発掘することはできなかった。また、両階段に対応する床面は、検出していない。そのうえ、  
階段 2 のステップ下層を掘り下げたが、土器その他の遺物を採集することはできなかった。

これに対して、階段 1 の北側部分の発掘では、表土中から 2 つの階段とは建築軸の異なる石壁  
が確認された。この石壁と対応するような床はみつかっていないが、壁底のレベルに比較的均一  
にならされたしまりのよい層が確認されており、この上面を床面相当レベルとしてとらえること  
が可能である。また、層位観察によれば、この石壁は階段 1 よりも高いレベルに位置している。

これらのことから、この区画には、少なくとも 3 つの建築フェイズが存在することが確認され  
た。遺物の全体量が少なく、大半が階段の覆土から出土したため、コンテキストはあまり確かで  
はないが、最終フェイズ（階段北側の石壁）は後期中間期か後期ホライズンに属するものである  
と考えられる。また、最終フェイズのものとは建築軸が異なることから、前 2 フェイズ（階段 1  
と階段 2）は、形成期に対応する可能性がある。その場合、根拠は脆弱ではあるが、遺跡踏査時  
に採集した土器片を鑑みると、インガタンボ遺跡のボマワカ期に相当するものと考えられる。

#### 4.2. 小基壇の発掘

イェルマ遺跡の南西部には、地表面で観察される石列の並ぶ小基壇が存在する。この基壇の中  
心部から東側は、かつて「発掘」<sup>(註6)</sup>されているが、それ以外の部分は手がつけられていない。  
そこで、今回の調査では、石列と「発掘」部分を通るように、東西 2m×南北 12m のトレンチを設  
定した。また、構造物を確認するために、トレンチの一部から東側に 2m×2m の発掘区を設けた。

表土をはいだところ、地表面で確認された石列は、表土中に底面をもつことが確認された。ま  
た、明瞭な面ももたないことから、この石列は現代の建築であると考えられる。

さらに、発掘区の南側半分は、以前「発掘」されたことで、大半の土砂が掘り返されているこ  
とが明らかになった。しかしながら、表土下の層からは、発掘区全体を南北に貫くように、アド  
ベで築かれた両面壁が検出され、部屋状構造物を構成していることが確認された（写真 9, 10）。  
この部屋状構造物は、黄褐色の上塗りが全面に施されており、保存状態は良好であった。そして、  
両面壁の東側と西側を地表面からそれぞれ 80cm、1.6m ほど掘り下げたところで、部屋状構造物  
の外壁（東側）と内壁（西側）に対応する床を検出した。なお、この床は、壁の上塗りと同様の  
土で建設されている。

この建築に対応する層からは、後期中間期と後期ホライズンのものと考えられる土器が確認さ  
れた。そのため、詳細については年代測定の結果をまつ必要があるものの、部屋状建造物はイン  
ガタンボ遺跡のタンボ期に対応するものと考えられる。



写真 8 主要階段区発掘区全景



写真 11 部屋状構造物 1 の土器



写真 9 部屋状構造物 1 の内面



写真 12 部屋状構造物 1 の土器



写真 10 部屋状構造物 1 の外面



写真 13 形成期の土器

特筆すべきは、インガタンボの建造物がすべて石組みできているのに対し、イエルマの事例がアドベで建設されていることである。この建築に対応する土器のなかには、ペルー北部海岸および最北部海岸〔Banks 1989; Cárdenas et.al 1991〕に顕著な「paleteada（たたきによる整形および装飾）」がほどこされたものが散見された（写真 11, 12）。このことから、イエルマは、インガタンボと比べてより強く海岸部に存在した社会の影響をうけていた可能性が示唆される。

その一方、部屋状構造物の床面を掘り下げ続けたところ、自然の岩盤に到達する直前に、発掘区北側で形成期の土器だけを含む層を確認した（写真 13）。

これらの土器は、インガタンボ遺跡のボマワカ期とインガタンボ期の両時期にまたがって確認されるものであるが、遺跡分布踏査でもインガタンボ期に特有の土器はみつかっていない。そのため、イエルマ遺跡の形成期層は、おそらくインガタンボ遺跡のボマワカ期に対応するものであ

ると考えられる。この形成期層に関連する建造物は検出されていないが、少なくとも形成期からイエルマ遺跡が利用されていたことは確かである。ただし、遺跡踏査時に想定したように、イエルマ山の裾野部分には、形成期の大神殿はなかったと考えられる。

## 5. おわりに：総括と今後の展望、課題

インガタンボでは、インガタンボ期の神殿の建設過程に関するデータの充実ははかれたこと、そしてタンボ期の空間利用の在り方についての新たな知見をえられたことが、大きな成果としてあげられる。

また、イエルマでは、形成期の神殿は認められなかったものの、後期中間期あるいは後期ホライズンに建設活動が活発になり、イエルマ山全体が遺跡複合となる過程の一端を示すことができた。その際、インガタンボとは異なる建築技法が用いられ、ペルー北部海岸に特徴的な土器がともなうことを確認できたのは、本調査の重要な成果である。

さらに、上述の成果にもとづいて、インガタンボ遺跡と流域内の他の遺跡との関係、および流域内の社会展開について、いくつかの見通しと課題がえられた。

これまで、ポマワカ期には流域内の近距離に複数の神殿遺跡が存在し、神殿を核とした集団が複数併存していたのに対して、インガタンボ期になるとインガタンボ神殿を中心として流域内を統合するような社会が出現したことを想定していた〔山本 2014〕。しかしながら、流域内で二番目の規模を有すると思われたイエルマにおける神殿の不在は、ポマワカ期からすでに、インガタンボの規模が流域内で突出しており、流域内において社会的統合の核となるような神殿であった可能性を示唆している。

その一方、後期中間期あるいは後期ホライズンについては、インガタンボとイエルマでは、建築技法や出土遺物に差異が存在することから、流域内の近距離に存在した社会間においても異なる社会展開が存在した可能性が指摘される。

こうした見通しを検証していくには、大きく二つの課題をクリアしていく必要がある。一つは、編年の精緻化である。現在、本調査で出土した土器分析を実施しており、これまでの調査成果と総合して、タイプ分類を充実させる予定である。また、両遺跡の建築フェイズに対応して、放射性炭素年代測定を充実させることで、インガタンボ遺跡に加えて、イエルマ遺跡の編年を確立させることに努めていく。もう一つの課題は、遺跡間の比較対象の材料となりうる、さらなる考古資料の獲得である。具体的には、イエルマ遺跡の他の区画（山の頂上部や斜面）にあるテラス状構造物や部屋状構造物、あるいは流域内で想定される他の神殿遺跡の発掘が不可欠であろう。

以上の課題に取り組むことで、ワンカパンバ川流域の編年を精緻化するだけでなく、インガタンボ遺跡とイエルマ遺跡の関係といった流域内の社会状況についても熟考し、ペルー北部の形成期および後期中間期と後期ホライズンについての知見をより深めていきたいと考えている。

### 【謝辞】

本調査は、JSPS 科学研究費若手研究 A（課題番号「26704011」）の助成をうけて実施されたものである。調査に際しては、日本のアンデス調査団の先生方や先輩諸氏に本当の多くのご助言を

いただいた。この場をお借りして、厚く御礼を申し上げたい。

最後に、いろいろなことが起きた 2015 年の調査は、調査参加メンバーとボマワカ地区の人々の支えがなければ、到底完遂することはできなかったと痛感している。公私ともにいつもわれわれを支えてくれる同僚や友人たちに心より感謝の意を表する。

## 註

- (註 1) 本調査メンバーは、筆者らに加え、ペルー・サンマルコス大学の学部生のオスカル・アリアス、シンティア・ワルカヤの 4 名である。
- (註 2) アンデスの編年体系は大きく二つある。一つは発展段階的な時期区分で、他方は考古資料にみられる特定の様式が広範囲に拡散する時期（ホライズン）を指標とする。「形成期」は前者、「後期中間期」と「後期ホライズン」は後者の編年体系に属する。ワンカバンバ川流域周辺地域では、「形成期」に相当する時期については、調査の充実しているカハマルカ盆地やチョターノ川流域を中心に、前者の編年体系を用いた詳細な編年が組まれている。また、「後期中間期」と「後期ホライズン」に相当する時期に関しては、調査例の多い北部海岸で、後者の編年体系が多用されている。こうした状況をふまえて、本稿では、先行研究との比較検討を円滑におこなうため、便宜的に両編年体系を同時に用いる。
- (註 3) 4 時期目に関しては、土層の攪乱などによってコンテキストの確かなデータが乏しいため、時期決定が困難である。これに関しては、2016 年に実施予定の、年代測定の結果をふまえて再検討する。
- (註 4) イエルマ遺跡は、ペルー文化庁より出版された遺跡地図に登録されているが、形成期のものとはされていない [Ravines 1983]。
- (註 5) ケブラーダは、一般的に涸れ谷と訳すことも多いが、イエルマの場合は常に豊富な水を有している。
- (註 6) イエルマ集落の住民によれば、考古学者と称する人々が来て発掘を実施したというが、そのような記録および報告は公式には存在しない。

## 引用文献

Banks, George

1989 Chronology of Peruvian Pottery. In *Peruvian Pottery*, edited by B. Cranstone, pp.11-28. Shire Publications Ltd, Bucks, United Kingdom.

Cárdenas, Mercedes, Cirilo Huapaya and Jaime Deza

1991 *Arqueología del Macizo de Illescas, Sechura, Piura, Segundo Informe: Excavaciones en Bayóbar*. Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima.

Instituto Nacional de Cultura

2006 *Programa Qhapaq Ñan: Informe por cuencas hidrográficas del registro de tramos y sitios. Campañas 2003-2004*. Fondo editorial del INC, Lima.

加藤泰建・関 雄二（編）

1998 『文明の創造力—古代アンデスの神殿と社会』，角川書店，東京.

Ravines, Rogger

1983 *Inventario de Monumentos Arqueológicos del Perú, Zona Norte (Primera Aproximación)*.

Instituto Nacional de Cultura, Lima.

山本 睦

2011 「ペルー北部、インガタンボ遺跡第三次発掘調査」，『古代アメリカ』14：89-100.

2012 『先史アンデス形成期の社会動態—ペルー北部ワンカバンバ川流域社会における社会成員の活動と戦略から—』総合研究大学院大学文化科学研究科提出博士論文.

2014 「先史アンデス形成期社会における人々の活動と戦略—ペルー北部ワンカバンバ川流域のセトルメント・パターンと景観—」，『年報人類学研究』4：1-32.

原稿受領日 2015 年 9 月 19 日

原稿採択決定日 2015 年 10 月 4 日